

タイトル：ペDESTリアンズ・イン・サイレンス

著者名：アツシ

140字のあらすじ：ある男は河川敷に横たわる一本の歩道を歩いていた。暗くなるまでには河川敷から出ようと考えていた彼だが、どれだけ行っても出口は見つからない。しかし、彼と出会う人々は絶えることはない。一体彼らはどこから来て、どこへ向かうのか。出口のない歩道の終わりの見えない静かな恐怖。

文字数：4486字

“歩行者・自転車はこちらへ”

車道の縁に寄り添っていた歩道は川沿いに差し掛かると、二手に分かれることになり、歩行者は河川敷の道へ、車は堤防上の道へと看板に誘導された。

それにしてもいい天気だ。晩夏にしか味わえない、この暑い空気の中に涼しい風が優しく吹く清々しさ。あと二週間も経てば、その涼しい風が季節の主役に躍り出るに違いない。路肩の木々は青々と茂っているものの、アスファルトで舗装された広い歩道へ手を伸ばすことはなく、礼儀正しく収まっていた。ここの道は河川敷にしてはやけに丁寧に舗装されているのだが、どうやら一部は工事に使われているようで、歩いていると頻りに“工事車両は速度落とせ”という看板が出てきた。ときたま、利用者にも出会う。彼らはランニングをしたり、気持ちよさそうにサイクリングをしたりするのだが、凹凸の一つないこのまっすぐと続く歩道なら、近所の人が利用するのも納得だ。振り返ると既に私が入ってきた入り口は見えない。ただ、前にも後ろにも歩道が伸びているだけであった。

左手にはショッピングモールが見え、右手の対岸にはタワーマンションが何棟も乱立している。ショッピングモールの手前には歩道と別れた車道が、未だに堤防の上を走っているのだが、この歩道と車道の間隔は徐々に広がっていった。気づけば堤防は遠く向こう、手の付けようがないほどに伸びた草がその間を埋めていた。日が落ちてからも、こうやって河川敷をうろついているのは危険だ。まだ時間はあるが、暗くなる前にこの歩道から町の方へでも出ようか。そう考えていた。そうしている間も、自転車に乗っている人に何回抜かされ、ランニングや散歩をしている人と何回すれ違ったか。ただ、これはあのように隔てられていても、町が近い証拠であった。

ただ、判然としないことが一つあり、それというのもどこにもこの道につながる出口や入り口が見つからなかった。この道に私が入ってきてから一時間は軽く超えるが、未だに出入り口を見なかった。どこかあろうものなら、草や木々の隙間から見えるショッピングモールなどの栄えているところへ堤防を越えていきたいものなのだが、その堤防とは全く隔絶され、ただその間隔が広がっていくばかりであった。ふと空を見上げれば、西の方は既に鮮紅色に染められている。早いところ出口を見つけ、この河川敷の歩道から抜けなければならない。

工事車両が路肩に駐車してハザードランプを点滅させていた。私が車の横を通り過ぎる

と同時にその車は発車し、私と反対方向へ進んだ。ただ、作業員一人は自転車に乗り、のろのろと私を追いぬかした。つまりは作業が終わり、作業員が帰宅の途に就くということだろう。あの作業員なら出口を確実に知っているはずだと確信し、そののろのろとした自転車のスピードに合わせ、私は後ろからついていった。既に、自転車のライトが目立つほど河川敷には影が落ちていた。

自転車が左に曲がり、スピードを上げたので、私も駆け足で左へ曲がると、既に自転車の姿はなかった。ただ、歩道は二手に分かれ、岐路にはオレンジ色の看板が立っていた。

“この先、右→国道512号 左→通行止め“

左は堤防へと続いていそうな道ではあったが、封鎖されてしまっていた。ただ、右を見ると、白い犬を連れた老夫婦が悠長に散歩をしている最中であつた。これも町が近くにあることを物語るものだ。私は痛み始めた足を必死に動かした。

空自体にはまだ明るさは残っているのだが、路肩の木々はその枝を限りなく伸ばし、無法地帯と化していたおかげで、歩道に届くはずのわずかな光も全く遮ってしまっていた。ただ、人通りは相も変わらず、スーパーの買い物袋を持った女性、イヤホンを耳にして颯爽と走る大学生。また、ジャージを着てはつらつとウォーキングをする中年夫婦。それに加えて、サイクリングをする人、ランニングをする人。彼らの様子は全く変わることはなく、彼らの存在が常に私に町が近いことを強く感じさせていた。

前から自転車のライトがゆらゆらと近づいてきた。目を凝らしてみると、これから帰宅するのであろうか、ごく普通の男だ。自転車の速度を緩めたかと思うと、ブレーキをきかせ、自転車を茂みの近くに止めると、そのまま音もなくその茂みに入って行った。私は恐るおそる自転車の前に行き、そのあたりの茂みを眺めたが、もう彼の姿はどこにもなかった。私の目の前にはただ、赤いさび付いた自転車が残されたばかり。そういえば、路肩に止まる乗り手のいない自転車を、先ほどからちらほらと見かけていた。ふと、歩道の先を見つめると、まっすぐ伸びた道には同じような自転車が何台か止められていた。

暗闇の中で小動物の影が見えたが、私の足音を聞いて茂みに隠れてしまった。私の足音は木々と完璧に舗装された道路のはざままでこだましていた。もう冗長に歩く余裕はない。早くこの歩道から出なければならない。既に日は落ち、夜を告げる冷たい風がふき始めた。うっそうとした茂みの中から何が出てくるかもわからない。私は早くこの場所から立ち去りたかった。ただ、未だに出口がどこにも見つからなかった。どこにもこの歩道からの出口は存在せず、この歩道は無慈悲にもただまっすぐ、奥へ奥へと続き、どんなに歩を進めても景色が変わることはなかった。いっそのこと、この茂みの中から町の方へと無理やり抜けようか、そう考えもしたが、茂みの中で木々の後ろが一段落ちくぼんでいることから見て、どうやら沢が流れているようであつた。反対はどうだ。反対は沢どころではない。大河川が流れていて一歩足を付けようものなら暗闇の中で人知れず流されて終わりであろう。私に突き

付けられた唯一つの選択肢が、この暗闇の中に一本通る歩道を進むことだけであった。

ただ、不思議なことに、少ないながらも一定の人通りが絶えることはなかった。買い物帰りの人、散歩中の人…。私はただ、彼らを頼りにして、この近くに町があって、すぐに出口が見つかることを信じて歩みを進めているのだが、いったい彼らはどこから来て、どこへ向かっているのだろうか。私とすれ違った人はあの入口まで行くのだろうか。いや、もう私があ入口を入ってしまったのは何時間も前だ。それに、彼らは皆ラフな格好をしているから、そんな長く歩くこともなかり。それならなおさらどうして…。そう考えることは、もう私に後戻りの道すらないことも示していた。彼らはどこから来ているのだろうか。

前から犬の散歩をしている老夫婦が歩いてきた。この暗闇の中でもしっかりと見えるほどの艶やかな毛並みをした白い犬。まさか私はこの犬は初めて見たのではないのだろうか。もしや、あの分かれ道で右に入った時、すぐに出会ったのが、この白い犬だ…。そして、そのリードをもってゆっくりと歩いているのはあの老夫婦ではないか…。いや、まさかそんなはずはない。脳が疲労のあまり人の識別能力を少し麻痺させているのだろう。そういえば私の足も既に痙攣をおこしそうなほどに悲鳴を上げている。これはミスだ。私の脳のミス。近所に町があると、自分が思い描いている通りなら、同じような老夫婦が同じような犬を連れていたっておかしくないではないか。

ただ、一抹の不安を抱え、先ほどから私を抜かしてはすれ違う通行人の顔をよく見ることにした。あろうことか彼らのすべては私がこの道のどこかで遭遇していた人たちだった。格好も、持ち物も、何もすべて変わらない。すべて同じ人たちだった。私はたまたま駆け出し、ただひたすらにまっすぐと伸びる道を進んだ。まさか、そんなことはないだろう。早く、どこか出口はないか。出口は。息が上がり、足が痙攣をおこしたため、足を止め、呼吸を整えた。膝に手を置き、前方を眺めてもただ、木々に覆われた道がまっすぐに続き、出口などはどこにもなさそうであった。

こうなっては整える呼吸も整えられない。また前から人が来た。スーパーの袋を持っている…。あの人だ…。私はまた走り出した。ただ一心不乱に駆けた。自転車が茂みに沿って乗り捨てられている。あそこにも、ここにも。そして私を抜かしたあの自転車。あの後ろ姿も私は見た。この歩道の上で見た。いくら駆けても、その勢いが全く続かない。何度駆けても何度も立ち止まった。ここまで何時間も歩いている足はもはや限界であった。大股に歩くこともできず、一切の光が消滅した一本道を進んでいた。もう一度駆けてみた。ただやはり続かない。

その時、私の後ろから一台の自転車が私を抜き去った。その自転車の後ろには赤いライトがついていたのだが、これは、私は見たことがなかった。私は動かなくなった足に手を置き、その赤いライトを見つめていた。一体どこまで行くのだろうか。一体どのようにこの道は続いているのだろうか。あの赤いライトが、これから私が歩かねばならない義務を負わされた道を示してくれるのではと感じたのだ。私はかすかな希望を抱いてその行く末を見つめていた

のだが、すぐに期待は裏切られた。赤いライトは遠ざかりその光を小さくしながら、まっすぐ進み続けた。どこを曲がるでもない。ただただ、まっすぐ進み続け、この道がこれからも続いていくという紛れもない事実を私に突き付けた。私は愕然とし、俯き、ただ深く呼吸をした。固く結ばれた靴紐、痙攣した脚、アスファルトで固められた舗装面、風に乗って飛んできた落ち葉。私の視界のあらゆるものにはもはや生气は感じられなかった。

絶望の淵に立たされていた。私は歩道を見つめながら、これからいったい私はどうなってしまうのだろうと考えた。いや、これからなどもはやないのかもしれない。あの老夫婦からすれば、あのスーパーの買い物袋を持っている人からしたら、私だって何回も出会う人間とされているのだろうか。大きく息を吐き、ふと顔をあげると、あろうことか赤い光がまだ先の方で残っていた。その上、先ほどと全く大きさを変えずに。どういうわけか自然と体はまた走り出した。身体的にもこれを走ったら、もう歩くことさえかなわないほどに疲れ切っていた。痙攣する足をおさえ、赤い光へ一直線に走って行った。何があるのかはわからない。ただ、その場に止まっているということは何かしらはあるはずなのだ。息も上がり、歩調もずれ始めたとき、赤い光、自転車の影は出発しすぐに左の方へと消えた。逃すまいと追いかけると、にわかにか開けた広場に出た。ここでも道が二手に分かれていたが、今度は看板がない。ただ、どこからか部活帰りの高校生三人組が賑やかに喋りながら私の前を通り過ぎ、左へ向かった。私は彼らの後を追って左の道路を進むと、堤防へと出た。そして眼下にはあるのは閑静な住宅街であった。後ろを振り返り、河川敷を望むと私が通ってきたであろう歩道は木々に覆われてその姿を確認することはできなかった。

啞然として、住宅街をさまよっていると上機嫌に歌をうたう女子高生が自転車で私を抜かしていった。

すてきな歌声だ。

空っぽの心に彼女の歌声がこだました。